

服部 正氏を憶う

工学院大学生産機械工学科 矢部 眞

1月28、29日と新幹線で九州行、若松・博多・熊本と廻りさすがに疲れた。その疲れも取りきれない31日朝、新聞を拡げて思わずうなった。服部正氏の訃報記事が掲載されていたからである。筆者より4歳も若い56歳だというのに……。まったく惜しい人を失ったものだ。

服部氏は東京工大建築科卒、応用物理から転科されたとか、ほんの少しばかりの間電々公社に奉職されてすぐ退社、コンピュータに早くから取りくまれ、そのほうでは数年前、天皇御臨席の園遊会の招待客の記事が新聞に載るほどの著名人だった。学会では役員をされたことはないが長年にわたって正会員、さらに、氏が創設され心血を注いで育成された榊構造計画研究所は賛助会員、そのうえ社員研修のためか、IFORS ごとに2名ずつ参加していただいている。なお、氏は(社)ソフトウェア振興協会にも関係しておられるとかで、このあたりの事情については筆者より詳しい会員諸兄もおられよう。筆者が追悼文を草するのはいささか気がひける。しかし、数回お目にかかっただけにすぎないが、お世話になったことだし忘れたい思い出があるので敢えて筆をとった。

氏と初めてお目にかかったのは、昭和38年夏の第3回IFORSオスロ大会である。第1回(Oxford)2人、第2回(Aix-en-provence)3人、第3回は5人で年齢順に記すと、江副達男(大成建設)、松田武彦(東工大)、稲場長滋(帝人)、筆者(国鉄)、服部氏(敬称略)である。旧知の方はOR教育コースの縁で単身一足先にパリに來られた稲場氏、お世話もしお世話にもなった松田先生はいうまでもない。なお、筆者は仏国政府給費技術留学生として、仏国鉄のOR活動調査のため在欧中。

この時、江副氏から「PERT 関係の発表がない。日本のほうが進んでいる」と。この一言で帰国後、国鉄にPERT導入を志し、江副氏にも部外委員になっていたいた研究活動でいささかお役に立つことができた。

ところで服部氏であるが、社長さんということはわかったが一見とつきにくかった。外国語もわかりにくいし、まして機械卒の筆者には数学は好きでも苦手だ。こんな所へ來れるのもそうたびたびあるまいと考えて努めてエクスカッションに参加。江副、服部氏と行をともに

することがしばしばだった。年長ということと取引があるとかで氏は江副氏を立てておられた。それで同社系の子会社かなとも思った。また、氏は某大新聞社が発行している科学雑誌から写真を頼まれフィルムをあらかじめともいわれたが、別に気にもとめなかった。さて、いよいよ明日閉会式という日、日本人だけで会食をやるということになり、待ち合せ場所で30分待ったが肝腎の方が見えない。とうとう諦めて4人だけで会食した。後でうかがったら、実行委員長から夕食を急に招待されたとか、まだ中進国の時代、日本をPRするための御苦労だったかもしれないが……。

さて帰国後のことである。ある日電話があつて「車を回すから来てくれ」とのこと。美人秘書が迎えに来てくれてホルスタイン協会内の氏の会社へ出かけた。びっくりしたことにはまだ他社に入っていないコンピュータの新鋭機が入っていたことだった。社長ともなれば忙しいらしく、待っていると「夕食を共にしよう」と渋谷の高級レストランでビフテキを御馳走になった。昭和44年頃ではなかったらうか、ゲバの後だったから……。

氏は要するに国鉄を辞めて手伝ってくれということだった。氏の御父上は東大医学部教授、御母上は熱心な日蓮宗の信者、会社草創の頃は自宅の応接間で仕事をやった。工法を發明しては特許をとり資金とした。事業は金ではない……まことに真の経営者で経営学者など足もとにも及ばないと感心させられた。ただ、まだ国鉄に未練があった。また、信頼する上司がつぎつぎと栄転され、せつかくのORセンターも危くなって自分1人だけ逃げるわけにはゆかなかつたのでお断りした。その後、仏国へ招いてくれた先生の本の翻訳をして電々公社の旧留学仲間から氏の会社の話を聞かされて、改めて尊敬したものだ。

第3回はOR金曜サロンでお目にかかった。感心したことは、氏が権威に屈するどころか、権威者のほうが鄭重だったことだ(これはレストランの時もそうだった)。またお目にかかりたいものといつも思っていたが、これは無理になってしまった。謹んで御冥福を祈る。合掌。